

「英詩人ミルトンと私」

小森禎司（桜美林大学名誉教授）。

（この論文は 2009 年 2 月 7 日、志学会で行った講演を加筆したものです）。

皆さんこんにちは。司会者の梅津先生からご紹介を頂きました小森禎司です。今日は志学会の後援会にお招きくださいましてありがとうございます。この会のメンバーには学生の方が多く聞いていますので、今日は「英詩人ミルトンと私」という題で、17 世紀イギリスの詩人ジョン・ミルトン（John Milton 1608—1674）と私の関係について分かりやすく話すことに致します。本題に入る前に、新約聖書、ヨハネによる福音書 9 章 1 節から 3 節を読みます。

またイエスは道の途中で生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生れついたのは誰が罪を犯したからですか？この人ですか？その両親ですか？」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神の業がこの人に現れるためです・・・。」

私は自己紹介に先だって、この聖書の箇所を引用することになっています。私自身が生まれつきの盲人だからです。栃木県的那須地方に生まれた私は地域の盲学校で教育を受け、マッサージ・鍼・灸など、いわゆる三療の資格を取りましたが、高校時代にクリスチャンになった私は大学進学を思い立ったのです。夢は盲学校の教師になることでした。盲学校卒業と同時に恩師鈴木彪平先生の計らいにより、桜美林学園の創立者、清水安三・郁子先生ご夫妻にお会いすることができました。清水先生ご夫妻は私の願いを叶えて下さり、1959 年(昭和 34 年)4 月、桜美林短大英文科への入学が許されました。桜美林短大から明治学院大に進んだ私は卒業後、母校栃木盲の非常勤講師になりました。それから 1 年後に結婚したのですが、結婚を契機として、私の人生は一変しました。

奇跡の人生

1964 年(昭和 39 年)10 月 10 日、東京の空は青く澄み渡り、神宮の上空には戦闘機の編隊が五輪の輪を描いていました。午後 2 時、東京オリンピックの開幕を告げるファンファーレが鳴り響きました。私たちが華燭の典を挙げたのは正にその時でした。パートナーは小森知子です。私達を引き合わせてくださったのは彼女が所属していた教会の玉田敬次牧師でした。玉田牧師は失明者で、

私をよく知っておられたからです。それにしても、何ひとつ不自由のない健常者の彼女に盲人の私が紹介されたのですから、この話は彼女にとっては、驚き以外のなにものでもありませんでした。しかし牧師が告げるメッセージを神の言葉として受け止めた彼女の非凡な信仰は、私のパートナーとなることを決意させるに十分なものでした。結婚式の日をオリンピックの開幕日、10月10日に決めたのも彼女の提案でした。下の引用聖句は彼女の提案の趣旨を暗示しています。

競技場で走る人たちは皆走っても、賞を受けるのは唯一人だということを知っているでしょう。ですからあなた方も賞を受けられるように走りなさい。また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私達は朽ちない冠を受けるためにそうするのです。ですから私は決勝点が何処か分からないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはいません。私は自分の体を打ちたたいて従わせます。それは私が他の人に述べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです（新約聖書、コリント人への第1の手紙、9章24—27節）。

彼女は上に引用したパウロの勧めとオリンピックのマラソン競技をダブらせて、私達の結婚生活を、神から朽ちない冠を得るために、二人三脚で走るのだととらえたのです。

桜美林への道

1965年（昭和40年）1月4日、私達は桜美林学園を訪れました。清水安三先生に結婚の報告をするためでした。私達を心の底から歓迎してくださった安三先生は、「二人で勉強して、桜美林で教えられるようになりなさい」と言って、励ましてくださいました。また英詩人ミルトンを研究するようにも言われました。結婚から三ヶ月もたたないうちに、私達の進むべき道が示されたのです。早速ミルトンに関する書物を読み始めました。最初に手にした書物は失明者岩橋武雄の『ミルトン研究』でした。この書物も安三先生から紹介された1冊でした。安三先生が私にミルトン研究を進められたのも、ミルトンが失明の詩人だったからです。私達は安三先生のアドバイスに従って明治学院大学の大学院に入り、2年後の1967年（昭和42年）4月、桜美林短大英文科の専任助手として採用され、以来2008年（平成20年）3月までの40年間、教育と研究の充実した日々を過ごすことができました。

二人三脚のミルトン研究

私達のミルトン研究はアメリカ留学にその基礎をおいています。1970年（昭和45年）9月から2年間、カリフォルニア州クレアモント大学で、コロンビア・ミルトン全集の編集に関わったフレンチ・フォーグル博士の教えを受けたからです。博士の指導のもとミルトンを読んでいくうちに、ミルトンの作品の根幹をなす部分が明らかになってきました。それらは真理の探究、善悪の識別、神への従順、そして忍耐の勧めなど、そのひとつひとつが私達の人格形成にとって、不可欠なものばかりであります。しかしミルトンの作品に現れたこのような特徴以上に私の心を捉えたのは、彼の生涯であり、政治に対するひたむきな態度でした。とくに彼の生涯—— 波乱万丈の生涯には心ひかれるものがありました。それらは2度にわたる妻との死別、失明、イギリス市民革命と挫折などでした。ミルトンが直面したこれらの出来事は彼の肩に重くのしかかりましたが、その都度彼は、キリストを信じる強い信仰によって克服していきました。今日はこのようなミルトンの生涯を概観しつつ、彼の政治的立場について考察し、さらにミルトンが理想とした政治理念を紹介して、混迷する今日の日本の政治のあるべき姿を考えてみたいと思います。

ミルトンの生涯は三つの時期に分けられます。第1期は教育時代（1608—39）、第2期は散文時代（1640—60）、そして第3期は叙事詩の時代（1660—74）であります。

第1期 教育時代

壮大な叙事詩『楽園喪失』（Paradise Lost）の作者ジョン・ミルトンを輩出した17世紀のイギリスは、まさにルネッサンス期を迎えようとしており、彼の父の誕生は、明らかに来るべき時代のさきぶれでした。オックスフォード社のヨーマン（Yeoman 自由農民）の子として生まれた父は、ミルトン家の伝統であったカトリックの信仰からプロテスタントに改宗したため、生れ故郷を離れてロンドンに移り住みました。ロンドンで教養豊かなルネッサンス教育を身に付けたミルトンの父は公証人となって富を築き、信仰深い乙女サラと結婚しました。そのような両親のもとに、後の叙事詩人ジョンは、1608年12月9日、ロンドンのブレッドストリート Bread Street に生まれました。両親を尊敬してやまなかったジョンは、Pro Populo Anglicano Defensio Secunda 『英国民のための第2弁護論』の中で、次のように書いています。

私はロンドンの名家に生まれた。父は高潔そのもの、母は清廉潔白、彼女の施しの行為はあまねく賞賛された。父は私の幼少のころから学問を施したが、そのことが契機となって学問の虜となった私は、12歳を過ぎると、真夜中前に床に就くことは殆どなかった。このことが失明の主たる原因となったが、生来視力が弱かったことも手伝って、しばしば激しい頭痛に悩まされた。しかし頭痛が私の向学心を損ねることはなかったので、父は日中は学校で、夜は家庭教師をつけて私を学ばせた。私は数ヶ国語をマスターし、表面的ではあったが、哲学の甘美な陶醉に浸ることができた。父はそんな私を英国2大大学の一つ、ケンブリッジに行かせた。この学び舎で7年間、誰の咎めも受けず、誠実な級友達から好かれ、伝統的な軍事教練と教養教育に励み、(Cum Laude 首席)で修士号を取得した。(私訳) Complete Prose Works of John Milton, Don M. Wolfe, et al., 8 vols., (New Haven, Conn.), 1953—82. Vol. IV, p612 ff

ケンブリッジを去ったミルトンは、少なからず両親を失望させました。両親は息子が必ずや聖職者になってくれるものと確信して、ケンブリッジのクライスト学寮に進学させたからです。ところが英国国教会の腐敗に業を煮やした息子のジョンは、聖職者になるよりも、詩人として、しかも歴史に残る叙事詩人として生きる決意を固めていたのです。そのため彼は父の別荘のあったハマースミスやホートンで自学自習の5年間を — 詩人となるための充電の5年間を過ごしたのです。学生時代に開花した彼の創作意欲は、自学自習の時期にも極めて旺盛でした。ケンブリッジ時代からホートン時代に創作されたミルトンの主な作品は『キリスト降誕の朝によせる讃歌』On the Morning of Christ's Nativity (1629)、『快活な人』L'Allegro『沈思の人』Il Penseroso(1631)、仮面劇『アルカディアの人々』Arcades(1633)、仮面劇『コーマス』Comus(1634)、そして友人エドワード・キングを追悼した哀歌『リシダス』Lycidas(1637)などの英詩の他に、『父へ』Ad Patremを含む数編のラテン詩や、初恋の人エミリアに宛てたイタリア語のソネットなども含まれています。これらの作品の中から、ケンブリッジ時代の無二の親友であったエドワード・キングの死を悼んで書かれた哀歌『リシダス』について触れておきたいと思います。この詩には、聖職者ではなく、詩人として羽ばたこうとする若きミルトンの思いが伝わってくるからです。

1637年秋、ミルトンは親友エドワードの訃報にせつします。ケンブリッジの研究者として前途を嘱望されていたエドワードは、イングランド北西部の町

チェスターからアイルランド沖を航行中遭難し、帰らぬ人となりました。このような状況の下で書かれた詩が 193 行からなる哀歌『リシダス』です。詩人はエドワードに「リシダス」の名で呼びかけますが、その名は古代ローマの詩人ベルギリウス（前 70—19）の牧歌を模したものです。

詩人は冒頭月桂樹、銀梅花、蔦など三つの植物に呼びかけます。太陽神アポロに捧げられる月桂樹は詩人の冠と勝利を表し、才媛の女神ビーナスに捧げられる銀梅花は愛の象徴であることから、詩を愛する意味とともに弔いをも表し、蔦は学問の象徴だからです。このことから詩人は歌を愛し、学問を愛した親友エドワードの死を悼むのです。また蔦はキリスト教芸術では不滅を表しています。とはいえ詩人は、未だ熟していない果実を手荒にむしり取ってしまったと言って、哀歌を書きたくなかった自分を嫌悪しつつ、若い友の死を悲しみます（1—5 行）。若いリシダスの死に報いるために哀歌を歌い、弔いの涙をながすのは、彼の遺体を海の墓に放置し、風に吹きさらされないためだ（10—14 行）というのです。ソネット形式で書かれた『リシダス』冒頭の 14 行は、哀歌の序奏であります。

詩人はこの序奏に続いて、「始めよう」begin を 2 度繰り返して、やおら哀歌を始めます。ここで読者が最初に目にする光景は、ミルトンとキングがともに学び、ともに暮らしたケンブリッジの回想の場面です（23—36 行）。この 14 行は実に快活に歌われ、青春を謳歌したことが伺えますが、詩調は突如一変します。

But, oh! the heavy change, now thou art gone,
Now thou art gone and never must return! (37—38 行)。

あー酷い変わりよう もう君は行ってしまった。行ってしまった君は 2 度と戻らない。

ここで詩人は初めて追悼の涙を流します。自然も彼の死を悲しんでいるというのです（39—44 行）。

しばしの追悼の後、詩人の筆は、遭難の原因を探ろうとします。当時海は波静かだったとみられていました。しかし厚い雲に行く手を阻まれた船は、岩に衝突したのではなかろうかというのです。詩人は波に、荒れ狂う風に向かつてエドワードを乗せた船に何が起こったかを問うても、当然答えは返ってくるはずがありません。そこで彼は「奇抜な着想」conceit を用いて、遭難の原因を斯く物します。「賢人ヒポタデスがもたらした答えは」こうです。「風も波もなかった海上に海の精パノピーが姉妹達を伴って現れ、遊び戯れ、致命的な呪

いの言葉を発し、辺りを曇らせ、清き君の頭を、海底深く沈めた」というので
す(96—102行)。詩人はここで *eclipse* 「日(月)食(101行)」という語を
用いていますが、ミルトンがこの語を用いる時は、その後に悲惨なことが起こ
る前兆です。

『リシダス』はガリラヤ湖の水先案内人ペテロの登場によってクライマックス
を迎えます(108—31行)。ペテロは会葬者のしんがりとして現れます。ペ
テロはずっしりと重い二つの鍵を持っています。その一つは金、他の一つは鉄
の鍵です。前者は戸を開け、後者は閉める時に使われます。ペテロは錠前を鳴
らし、厳しい語調で、時の大主教ロードを非難します。ロードの宗教改革の不
備を責め、私腹を肥やす彼とその一派を「狼」*wolf* と揶揄しています。私腹を
肥やし、地位を望む者には、善良な信徒である羊を救うことは出来ないと訴え
ます。彼らの説教には御霊はくだるはずがないというのです。ペテロが開けた
戸口からは善良な羊が天に迎えられ、閉められた戸の部屋には悪しき祭司らが
閉じ込められます。若いエドワードの命を奪ったのは、実にこれらの悪しき祭
司達だというのです。これらの詩行には宗教改革に強い思いを寄せる詩人ミル
トンの情熱が感じられます。教会を画一的にし、儀式的にすべきではないとい
うのです。この主張は、後になってから、ミルトンの宗教改革論となっていき
ますが、ここで詩人がペテロを祭司の理想像としていることは注目し値します。
(正義の)「剣の柄に両手をかけたペテロは戸口に立ち、腐敗した国教会の大
主教ロードを「今一度打ちのめそうと身構えている」(130—31行)」というく
だりは、国教会を根底から作り直そうとする詩人の主張であったことは疑いあ
りません。

哀歌も終わりに近づきますが、詩人は友の死を、イエスの死と復活に結びつ
けます(165—85行)。これらの詩行にはそのイメージが随所に散りばめられ
ています。リシダスは海底深く沈んだけれども、夕べに沈む太陽が明日に上る
ように、「リシダスは深く沈み、高く上った」と歌います。リシダスを復活さ
せたのは、海の上を歩いたイエスの力によるのだというのです(166—73行)。
天に上ったリシダスは聖徒らの歓迎を受け、この世のすべての苦しみ悲しみか
ら解放されます。詩人は「明日は新たな森へ、新たな牧場へ」*To_morrow to fresh
woods, and pastures new* と歌い、明日に向かってはばたく自分を宣言します。

(注) *The Minor English Poems Lycidas*, (pp636—734)

哀歌の結びの行に促されたかのようにして、ミルトンは1638年5月、従者
一人を伴って大陸旅行に旅立ちます。15か月に渡る彼の大陸旅行は実り多いも
のでした。彼の豊富な知識と優れた語学力は言うまでもなく、父親の豊富な人
脈も大いに役だったからです。彼は行く先々で傑出した学者、文化人、芸術家

と交わり、一挙に世界を広げていきました。彼はフランス・イタリア・そしてスイスを訪れましたが、とりわけルネッサンス発祥の地、フィレンツェは、言葉に尽くせぬ感動を与えました。そのフィレンツェでミルトンはガリレオに会いましたが、その時彼が受けた衝撃はひとしおならぬものでした。失明者となり、すでに老人の域に達していたガリレオは、地動説を唱えたかどで宗教裁判を受け、自宅軟禁されていたからです。その様を目にしたミルトンは、学問研究の自由の大切さを学びました。このような貴重な体験が彼を自由への戦いへと導いていったのです。

第2期 散文時代

私は先にミルトンの生涯は三つの時期に分けられえるといいましたが、そのもっとも重要な時期は第3期、叙事詩の時代とすることに異論を唱える必要はありません。しかし、この見方は詩人ミルトンを論ずる場合に限られています。一方ミルトンが歩んだ生涯にスポットを当てますと、彼の生涯の第2期（1640—60）も第3期のそれに劣らず重要であることが分かります。第2期は「散文時代」の名に違わず、ミルトンは殆ど詩を書いていません。その理由は、ピューリタン革命の引き金となった王党派と議会派の内乱の前後に、自由と解放を強く訴えたミルトンは、議会派の立場に立って、多数の論文を書いていたからです。この時期にミルトンが書いた論文は、主に市民の自由を訴えたものでした。ミルトンの論文中に見られる共通のテーマは宗教の自由、家庭の自由、そして政治の自由であります。宗教の自由に関する論文は、英国国教会の監督制度に抗議した5編の宗教改革論であり、家庭の自由に関する論文は、メアリー・パウエルとの浅はかな結婚の反省から生まれた4編の離婚論であり、政治の自由に関する論文は『アレオパギティカ』*Areopagitica*（言論出版の自由 1644）に見られる政治の理想と民主主義の主張であります。加えてこの時期は妻との死別、失明、革命と王政回復による挫折など、実に多難な20年でした。これらの出来事の中から私は、2008年7月7日、イギリスのロンドン大学で開かれたミルトン生誕400年記念国際シンポジウムで発表した論文、「日本の政治とミルトンの『アレオパギティカ』」の要旨を紹介して講演の結びといたします。

2001年7月29日、今世紀初の国政選挙が行われました。参議院議員選挙でした。私はその選挙に立候補しましたが結果はついてきませんでした。それにしてもなぜ私は参院選に立候補したのでしょうか。それには少なくとも二つの理由がありました。その一つは元自治大臣白川勝彦氏との出会いであり、他の

一つは、政治かけたミルトンの情熱に触発されたからです。

2001年2月上旬、私は白川氏が自民党を離党して、「新党自由と希望」を立ち上げるというニュースに接しました。このニュースに強い関心を覚えた私は早速白川氏と会って意見を交わし、二人はすぐに意気投合したのです。白川氏は1990年代初期に起こったバブル崩壊とそれに続く不況の原因の一つが、政治の閉塞感から来ていたにもかかわらず、政界も、財界も、そのことに気付かず、有効な解決策も見出せない状況を嘆いていました。白川氏はこの閉塞感を打破するために新党を結成して、参院選に臨むののだとして、改革への熱い思いを熱っぽく披瀝されました。白川氏の話をしているうちに、私の心は挑戦する思いに駆り立てられていきました。白川氏が理想の政治家像を求める時、「政治を志す者は学識があり、賢く、思慮深く、良く躰けられているべきである」という古代ギリシアの雄弁家、イソクラテスの教えを範としていたからです。私は今日の日本の政治の状況を、1640年代のイギリス議会のそれと対比して考えてみました。1640年代にミルトンが感じていた政治家に対する不満は、彼らが民主主義に徹していなかったことでした。ミルトンによれば、彼らは先にふれたイソクラテスの原則から遠く離れていたというのです。ミルトンは『アレオパギティカ』において、政治家のあるべき姿に言及していますが、それによると、政治をする者にとって最も大切なことは高潔な人であり、国民の不満に迅速かつ効果的な対策を講ずる能力の持ち主であり、善悪を識別し、悪に対して断固として戦うことであるとしています。

私は「新党自由と希望」の綱領の下に、「政界浄化」を自分のテーマとしていました。1640年代のミルトンが王政を打破して、ピューリタン革命による共和政府の樹立を願っていたように、私は日本の政治を永田町や霞が関の利権の体質から、国民のための政治——真の民主政治への転換を願っていたのです。参院選を間近にして、森喜朗政権は内閣支持率の低下に喘いでいました。そのような状況の下で、私達にも十分つけいるチャンスがあると思われていたその矢先、思わぬ伏兵が現れました。それは小泉純一郎総理の出現でした。

長引く不況と政治の閉塞感の中で、多くの国民は行財政の改革を望んでいたのです。このような状況を巧みに利用したのが小泉首相でした。小泉氏はこの機会を捉えて、自民党の解党的出直しを宣言、さらに行財政の抜本的改革を訴えました。「聖域なき財政改革。」「改革なくして成長なし」といった改革のスローガンは、またたく間に有権者の心を捉えていきました。私達は小泉政権が掲げる改革の内容に強い疑いを持っていましたが、私達を含む全野党の主張は小泉旋風に吹き飛ばされ、多数の有権者は、小泉改革の内容を吟味することなく、ポピュリズムにあおられていったのです。小泉政権を支持する彼らの熱狂ぶりは正に異常でした。かくして小泉政権は「改革」の名の下に2001年夏の

参院選に勝利し、郵政民営化の是非を問うた 2005 年 9 月の総選挙にも大勝して、5 年余り続いた小泉劇場に終止符を打ち、安倍晋三氏に総理の座を譲り、さらに福田康夫氏、麻生太郎氏へと、政権のたらい回しが続いています。

では何故このような状況が起こっているのでしょうか。それは安倍政権の頃から、小泉主導で行ってきた一連の改革は改革ではなく、改悪であったことが分かってきたからです。この事実を追い打ちをかけたのが 5 千万件に及ぶ消えた年金記録をはじめとする、社会保険庁の失態でした。このような問題をはらんで行われた 2007 年 7 月の参院選で、安倍政権は歴史的敗北を喫し、退陣に追い込まれ、福田政権、麻生政権へと続いて今日に至っているのです。

ではここで小泉改革の主なものを見ていきますと、その一つ一つに重大な欠陥があったことが分かります。たとえば、国立大学と国立病院の形態を独立行政法人に格下げして補助金を減らし、教育と医療の質の低下を招いたこと。社会保障費の伸びを抑制して、母子加算の打ち切りなどに見られるように、福祉を後退させたこと。障害者自立支援法の名の下に、障害者施設の各種補助金をカットして、年金以外に収入のない施設利用者に重い負担を課したのです。この事実が示すように、障害者自立支援法は、自立支援法ではなく、障害者いじめ支援法であることが明らかとなりました。後期高齢者医療制度も、その性格からして、高齢者いじめ医療制度と呼ばれても仕方ありません。彼らの改革の意図は、予算の切り詰めと増税以外のなにものでもなかったのです。また郵政民営化によって、過疎地の郵便局は、採算割れを理由に廃止に追い込まれるケースが続いています。このように小泉改革は今や負の遺産として、国民にその爪痕を残しているのです。教育、福祉、医療を劣化させてきた自公合体政権は、総選挙によって下野しなければなりません。しかし現政権を下野させることができるか否かは、皆さんの一票にかかっているのです。特に若い世代の皆さんにお願いします。もっと政治に関心を持ち、選挙に行って、政治の流れを私達の手に取り戻しましょう。皆さんの投票行動によって、新たな希望の光が差し込んでくるのです。この新しい流れの実現のためにミルトンが提案していることは、道徳教育、宗教教育、そして政治教育の充実であります。日本では特に宗教教育と政治教育が疎かにされています。皆さんもあらゆる機会を活用して、自分の意見を持ち、積極的に発言し、より良い社会、平和国家建設のために力を注ぎましょう。

ご清聴ありがとうございました。